

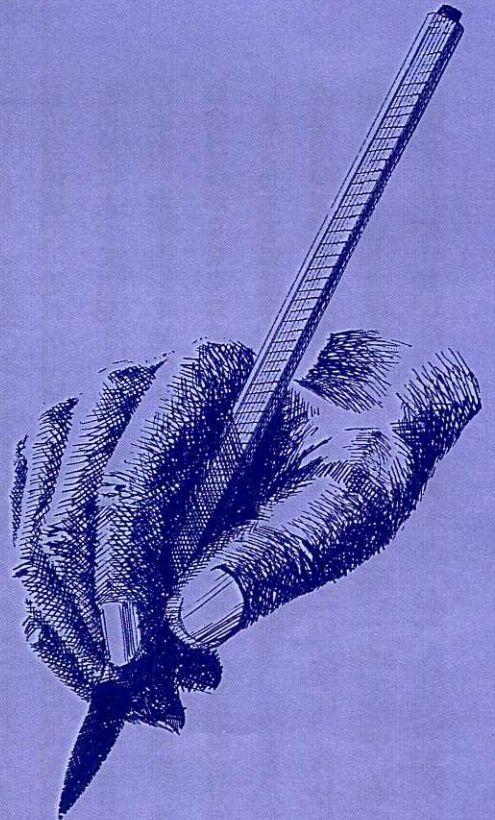


書心

東京教育学院

書法院

『ペン字手習い』



『手書きの文字』は

心と礼を伝えます

書は人なり

◆字は書き手の性格

教養・人格・品性を伝える

昔から「書(字)は人なり」といって、書かれた文字の筆跡で、その人の人柄や性格を判断してきました。文字を書くということは、その人の心が書かれることで、書いた字を見れば、その人がどのような人であるかがひと目でわかるということです。

文字を書いて、相手に伝達するという行為は、書く文章の善し悪しや、文意だけではなく、書かれた文字の姿・形・筆跡などによって、その書き手の性格や教養・人格・品性までも伝え

ることになります。

◆「書くこと」と「話すこと」

はじめに、人間同士が意思を伝えあつたのは、身振り・手振りの身体語で、それが「話し言葉」に発達し、更に音声で文字と符号によって表記する「書き言葉」が、中国でおよそ三五〇〇年前、漢字として発生しました。文字の出現は、時間的・空間的な広がりをもつこととなり、民族・文化を著しく発展させました。日本では漢字の流入後、かな文字の出現で、漢字とかなの混合の文字言語が誕生しました。そしてこの文字は、美しく書くものとして受け継がれ、芸術にまで高められながら日本の伝統文化となりました。こうして日本人一人一人が文字を美し

く書くために精進してきたことは、日本人の精神構造に多大な影響を与え続けてきたといえます。

◆『ペン字手習い』で

品格ある文字を

世は正に情報化時代。携帯電話・パソコンが普及しましたが、これだけで真の人間の思いや心が伝わりはいたしません。時代

が如何に変わっても、人間そのものが持つ手で、文字を書いて伝える手書き文字「書き言葉」と、口で話す「話し言葉」がなくなることは絶対にありません。今を生きる私たちは、現代の筆記具ペンで、美しい文字が書けなければなりません。今こそ『ペン字手習い』で字習いし、美に対する感性を高め、より豊かな情操を養い、更には芸術性をも追求して品格ある文字を書きたいものです。



中国の歴史において、書でもっとも高い地位を占めて

いて書聖と言われているのが王羲之(三〇七〜三六五?)です。山東省の生まれで、東晋の政治家・能書家。

字は逸少(いっせう)といい、官名により王右軍ともいわれました。

蘭亭叙冒頭の永和九年(三五三)浙江省の蘭亭に江南の貴族四十一人が集い、禊ぎの儀式を行った後、流觴曲水の宴を開き、詩酒に興じ、そのとき成ったといわれる詩集の序文を「蘭亭叙」といいます。叙を序

としていますが本来は叙です。これは王羲之四十七歳の時の書といわれていて、古来、行書の手本として、また内容とともに最も高く評価されてきたものです。

中国の書聖 王羲之の蘭亭叙

「蘭亭の宴」は、この宴以前の西晋末に開かれた石崇の集会「金谷の宴」を模したものとされています。

後に、この真蹟は唐太宗皇帝崩御の際、陵墓に副葬

され、現在伝わるのは全て臨模されたものと拓本です。

この蘭亭叙には真偽の論争があつて、王羲之卒後二世紀後にこの名称で前半が出て、全文が現れたのは三百年後の唐六五〇年頃です。

書道史の変遷の観点から考察して、書体では王羲之の時代に隸書体を既に脱却していたか疑問もあつて、叙帖の多くが真行草模範という形となつていて、ことから蘭亭叙は智永の作という説もあります。

れる「梅花の宴」はこの「蘭亭の宴」を模したもので、日本における詩宴の初めといわれています。これには大伴旅人・山上憶良らの歌が32首入っています。

- 八三 我が園に 梅の花散る ひさかたの大伴旅人
- 八二 春されば まつ吹くやどの 梅の花 山上憶良
- ひとり見つつか 春日くらさむ

